



高野さんのハウスでは1日に、1千~2千本のキュウリを収穫する。アルバイトなどは雇わずにすべて1人で作業するという。

写真上/西中さんは「収穫量よりも質」がモットー。高品質米の生産者として農協から何度も表彰されている。  
写真右下/高野さんは空き家となっていた中古住宅を2017年に購入した。



鷹栖町に  
移住したヒト 01

高野 しょう祥さん

旭川市出身。テレビで見た農業に興味を持ち、中学生の時に農作業を体験し、農業高校に進学。卒業後すぐに鷹栖町の農家、西中敏美さんの家で研修を始めて、21歳で独立した。現在は1人でキュウリや米の栽培を行っている。22歳。

真っ白な18歳の青年と  
熟練農家の第3者継承

2009年に鷹栖町が行った調査によると、「後継者がいない」もしくは「わからない」と答えた農家は全体の8

割以上に上った。現在、60歳以上の人が経営する農家は200軒を超えている。後継者がいない家も多い。ここまではどこにでもある話なのだが、鷹栖町の動きは早かった。2015年に60歳以上の経営者が営む農家に対してアンケート調査を行い、第3者継承つまりは血縁関係のない人に対して、農業を引き継ぐ意思があるかを確認している。ここでは第3者継承に挑んだ西中敏美さんと高野祥さんの師弟物語を追ってみよう。

西中敏美さんは鷹栖地区で長年農業を営んできた。2018年で入植から100年の節目を迎えた農家の3代目にあたる。子どもたちはすでに農業とは異なる道を選んでおり、後継者は早くから白紙状態。西中さんは「先祖に申し訳がない」と長らく心の片隅で悩んでいたという。「後継者募集」と電車に中吊り広告を出そうかと本気で考えたこともある」と、15年ほど前から後継者の受け入れについて考え続けて

いたとか。そこへやって来たのが中学生の高野祥さんだった。旭川市で生まれ育った高野さんは、幼い頃から自然や農作業に興味がある少年だった。中学生の夏休みを迎えると、母親の伝手で西中さんの農場で農業体験をすることに。主に学んだのはキュウリの接ぎ木作業。毎日自転車で山を越え、西中さんのハウスに通った高野さん。農業への思いはさらに強まり、高校は農業高校に進学した。そこで目の当たりにしたのは、農家出身で農高に進学しても家を継がない同世代がいるということ。高野さんは同級生が恵まれた環境にあつて後継者の道を選ばないことが不思議で仕方なかった。進路を考えたとき、高野さんには2つの選択肢があった。ひとつは法人で農業を営んでいる会社に社員として就職する。もうひとつは卒業後すぐ独立に向けて動き出す。高野さんが選んだのは後者。断固たる決意で西中さんの家を訪ねた。「おじさんのところで農業をさせてもらえませんか」。

ばっちりだったのだ。西中さんはちょうど引退を考えていた時期で、前年にはキュウリの栽培を辞めていた。元々勘定に入れていなかったキュウリの生産。「どうせ辞めたのだから、損得は関係なしに教えることができる」。ハウス3棟のうち2棟を高野さんに託し、1棟は長年キュウリを作ってきた妻が担当。高野さんに同じ作業をやらせてみたという。

高野さんは3年間の研修を経て、4年目から晴れて独立経営をスタートさせた。若冠21歳。5年目を迎えた現在はキュウリのハウス3棟に加えて、西中さんから米を少し引き継いでいる。キュウリは6~10月まで収穫が休みなので続く。1人で作業をしている高野さんだが、「真面目に寡黙に一生懸命」そんな言葉が似合う農業青年に成長していた。

西中さんは高野さんの相談に驚いたが、内心自分が頷くことを確信していた。「昔から空想していたから。後継者として受け入れようと決めました」。後でわかることだが、タイミングが

西中さんと高野さん。年齢は離れているが、農業への愛情が2人からじんわりと伝わってくる。血は繋がっていないけれど、親と息子のような間柄。「祥くんに引き継いで満足してるんだ。一人前になってくれれば、俺もうれしい」と西中さん。こんな第3者継承が鷹栖町でもっと生まれてほしい。継承の手のような2人に感動を覚えた。